

〔論 文〕

大学生向け殺生行動尺度の作成の試み

— 子ども時代の生活体験の効果の分析を通して —

三浦香苗・長澤陽平*・石井正子**

A Trial Construction of a Scale for College Students on Destroying Lives

— Effects of their past experiences on life-destroying behaviors —

Kanae MIURA, Yohei NAGASAWA* and Masako ISHII**

The purpose of this study is to investigate how contemporary college students perceive destroying living things. In Study 1, an attempt was made to make a scale incorporating factor analysis of various items concerning destroying lives. The result extracted three subscales: “brutal destruction for play”, “destruction for human living”, and “destruction for educational practice”. In Study 2, we examined relationships between the three subscales and student past experiences. Results showed that the three subscales had correlations with “wild play experience” and “experience of gathering food”. In Study 3, the scale of destroying lives was completed, and the correlation with human living experience and their sense of life value were investigated. The results showed that experience of keeping a pet worked negative toward “brutal destruction” and “dissection”. Also, “field play experiences” and “experiences in home” worked positive toward “dissection”.

Key words: life destroying behavior (殺生行動), brutal destruction (嗜虐的殺生), scale construction (尺度作成), living experience (生活体験)

私たちは、他の生物を食物として摂ることによって、自己の生命を保持している。しかし、分業化・階層化された社会では、大多数の人間は他の生物を捕獲・採取する作業に直接に関わらない。このことが生存に必須の殺生を嫌悪したり、不必要な殺生を安易に行ったりする傾向を生むと筆者らは考える。また、人間を他の生物より価値があると考え人間中心主義の考え方では、人間の命はこよなく大切に、人間にとって快適な生活をするためには多くの努力をするが、そのためには、他の生物の生命を軽視し、生態系を崩すことを意に介さないことが多々

生じている。最近学校教育の中でも、環境教育の重要性は強調されているが、そこで目指そうとしているものは、人間の衣・食・住までを考えた地球規模の生態系としての環境を考えるのかに関しては疑問の実践も多い。

この研究は、将来教職を目指す学生が、人間が他の生物の生存を止めること、つまり殺生することを、どのように考えているかを明らかにし、それに彼らの幼少期の経験がいかに関わっているかを明らかにしようとするものである。

本研究では、アンケート調査を3回行っている。

*千葉市立宮崎小学校 (Miyazaki Elementary School in Chiba-shi)

**植草幼児専門学校 (Uekusa Kindergarten Teacher Training School)

研究Ⅰでは、生物を殺生する行動についての躊躇が対象の種類によっていかに異なるかを測定する尺度の作成を目指したものである。研究Ⅱは、研究Ⅰで作成された尺度の再吟味と尺度と生活体験との関わりを見たものである。研究Ⅲは、さらに尺度に吟味を加え、殺生行動と、生活経験と人間についての価値観との関連を見たものである。

研究Ⅰ

人間の「死」に関する研究は最近よくなされている。例えば、丹下（1999）の「青年期における「死」についての態度」を検討したもの、芳賀（2001）の「児童・生徒の死観について」、林（2001）の「現代青年の生き方に関する意識調査」などである。これらは、「死生観」、あるいは「死」についての意識調査研究である。これらは、日本の宗教や社会的観念の影響を受けつつも、最近欧米化している現在の児童・生徒・青年の「死観」に関するイメージを調べるものである。これらの研究は、現代日本の「生きがい」や「人生観」とは関わるが、筆者らが問題としたい自己に関与した形での殺生行動に関する意識とはつながりにくいと考える。また、具体的な生活場面での人以外の「生命」についてふれた研究としては今井（1994, 1995）の研究がある。これらは、木、犬・猫、金魚、小鳥について扱っているが、主にアニミズムや死後観についての研究である。仲村（1994）の研究も生物学的な意味での死の概念を子どもがどう獲得していくかを見たものである。このように、本研究に直接関わるものは、筆者達には、心理学・教育学関係の文献では見出すことはできなかった。そこで、本研究では、これらの研究を参考にしつつも、斬新な視点からより基礎的な資料収集から出発する。

そこでまず、殺生行動尺度に関わる先行研究がないため、新たに質問項目を設定する必要がある。新たな尺度（以後これを殺生行動尺度とする）を作成するための予備調査として、採用するに適した質問項目を絞り込むことを目的とする。

方 法

- 1 調査対象：千葉大学教育学部 201名
- 2 調査時期：2001年7月下旬
- 3 調査内容：質問項目は次の3つの場面から構成した。

① 日常にあり得る殺し。

害虫や雑草、食用の動植物の取り扱い方など日常的にあり得る場面を13項目設定した。

② 教育上必要に迫られておこなう殺し。

解剖や実験という名目でおこなわれる殺しについて4項目設定した。

③ 遊びとしてはありえてもおこなう必要性はほとんどないと思われる残酷な殺し。

その対象として虫（観賞用、その他）、魚、両生類、は虫類、鳥類（よいイメージの鳥から悪いイメージのものまで）、ほ乳類などを殺すことを問うた23項目を設定した。

これらの具体的な項目は、表1を参照。

また、「殺す」とは殺意を持ってある行為をし、必然的に死に至らしめることと定義して明示した。

選択肢は、「できる(5)、できると思う(4)、できるかどうかわからない(3)、できないと思う(2)、できない(1)」の5つである。

- 4 実施手続き：大学の講義時間の一部を利用して集団実施した。

結 果

1 項目別結果

項目別の平均と標準偏差は表1に示した。「雑草を抜く」の4.93、「蚊を手で潰す」の4.66という高い値、即ち、実行できる確信度の高い項目から、「カエルを踏みつぶす」・「カメの腹にナイフを刺す」の2.25まで分布する。「できない」傾向に関しては、2以下の値の項目がないのは、やったことがない学生が多かったためか、「できるかどうかわからない」「できないと思う」「できない」が程度の差として認知されなかったためと思われる。

2 因子分析結果

主因子法を用いバリマックス回転をおこなった結

表1 研究Iで用いられた項目

使用した項目	平均	標準 偏差	因子分析			因子分析(再分析)		
			F 1	F 2	F 3	FF 1	FF 2	FF 3
① 日常にありえる殺生項目								
5. ゴキブリをスリッパで叩きつぶす	3.62	1.30						
10. 蟻を手で潰す	3.21	1.26						
11. ナメクジに塩をかける	4.17	1.07		.477			.475	
12. 木を切り倒す	4.17	1.01		.521			.576	
15. 雑草を抜く	4.93	0.35		.304				
16. クモを新聞紙で叩き殺す	3.94	1.17		.458			.454	
21. 花壇の花を抜く	4.00	1.12		.466			.511	
26. 生きている貝でみそ汁を作る	4.06	1.12		.559			.543	
29. ハエをはえ叩き潰す	4.43	0.93		.608			.581	
31. 健康な木を燃やす	3.72	1.17		.444			.486	
37. 小魚の『踊り食い』をする	3.23	1.18		.392				
39. 蚊を手で潰す	4.66	0.86		.441			.384	
40. 自分の釣った魚をさばく	3.62	1.19						
② 教育上必要な殺生項目								
1. カエルの解剖をする	3.17	1.23			.764			.932
2. フナの解剖をする	3.48	1.25			.656			.702
3. ヒトの解剖をする	2.41	0.95			.636			.452
17. 実験用のマウスに毒物を注射する	2.82	1.13			.447			
③ 日常の中にはほとんどないと思われる残酷な殺生項目								
4. 雛のいるスズメの巣を壊す	2.34	0.73	.680			.673		
6. 生きているメダカを土に埋める	2.57	0.94	.678					
7. カエルを踏みつぶす	2.25	0.62	.682			.698		
8. カタツムリを踏みつぶす	2.40	0.81	.758			.740		
9. カブトムシを棒で叩き殺す	2.31	0.70	.762			.851		
13. カメの腹にナイフを刺す	2.25	0.69	.696			.739		
14. コオロギの足をもいで殺す	2.43	0.86	.741			.695		
18. ヘビを棒で叩き殺す	2.72	1.07	.534					
19. ウサギ狩りをする	2.49	0.97	.535					
20. ニワトリの首を絞めてさばき、食べる	2.52	0.99			.441			
22. カメの甲羅を剥ぐ	2.25	0.61	.655			.734		
23. スズメを水に沈めて殺す	2.27	0.66	.793			.793		
24. ザリガニを踏みつぶす	2.36	0.73	.800			.824		
25. 雛のいるカラスの巣を壊す	2.43	0.82	.621			.618		
27. ミミズを引きちぎる	2.60	1.03	.682					
28. ナイフでメダカの頭を落とす	2.61	0.98	.665					
30. ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める	2.55	0.95	.629			.605		
32. コオロギを踏み潰す	2.62	0.99	.699					
33. カブトムシの腹にナイフを突き刺す	2.36	0.77	.811			.822		
34. カメを火にくべる	2.33	0.74	.747			.739		
35. ナメクジの体をナイフで半分にする	2.56	0.95	.714					
36. ヘビの頭をナイフで落とす	2.46	0.91	.694			.658		
38. 雛のいるツバメの巣を壊す	2.33	0.70	.680			.707		

果、固有値1以上の因子解は8因子解で全体の65%を説明した。しかしこれでは解釈が困難であるため、筆者らが当初想定した3因子前後の2~4因子までを設定し、再度回転をかけた。その結果、3因子解

を採用した。3因子解は全体の45%を説明した。その結果を削除前の結果として、表1に示してある。回転後の因子負荷量が0.4以下の項目を排除し、再度因子分析を行った。固有値1以上の因子解は3因

子解で全体の48%を説明した。

第1因子は「カメの甲羅を剥ぐ」や「スズメを水に沈めて殺す」といった非日常的で残酷と思われる項目が含まれていたためこれらを残酷性因子とした。項目数は15である。

第2因子は「ハエをはえ叩きで潰す」、「木を切り倒す」といった日常にありふれた項目が含まれていたため日常性因子とした。項目数は8である。

第3因子は「カエルの解剖をする」、「フナの解剖をする」といった日常的ではないが学校等で教育や研究として行われているような項目が含まれていたため教育性因子とした。項目数は3である。

「ニワトリの頸を絞めてさばき、食べる」は、当初は第3因子として入っていたが、再分析では除外されてしまったものである。これは、田舎では現在も行われており、しかも学校で実施されているところがあるために、第1因子ではなく第3因子に入ったと思われる。

これらの因子についての信頼性係数を算出したところ残酷性因子は0.96、日常性因子が0.78、教育性因子が0.76といずれも高く、信頼性は確認できた。

研究 II

学生の殺生行動（可能性）に影響を与えるものとして、子ども時代の生活経験があると思われる。そこで、研究Iの因子分析によって絞り込まれた3因子の質問項目（殺生行動尺度）とこれまでの「いのち」のやりとり経験についての質問項目（生活経験尺度）との関連を調べることにする。

方法

- 1 調査対象：大学生 276名
- 2 調査時期：2001年10月下旬～11月中旬
- 3 調査内容：①殺生行動尺度 研究Iと同様の3つの場面から信頼性を確認できた25項目にぜひ残しておきたい項目や新たに加えたい項目などを加えた27項目を設定した。

選択肢は、「できる(5)、できると思う(4)、できるかどうかわからない(3)、できないと思う(2)、できない(1)」の5つである。また、5段階評定で程

度を見ることであることを注意した。

- ② 生活経験尺度 子どもの頃を思い出して、「いのち」のやりとりに関わる経験をしたかどうかを次の3場面の18項目で尋ねた。

ア 特に殺す理由のない殺し

遊びの中での動植物に対する殺しなど、必要に駆られて行うものではない、殺しに関する経験の有無について3項目からなる。

イ 殺す理由のある殺し

食べるために殺すなど相当の理由があり、必要に駆られて行う殺しの経験の有無について4項目からなる。

ウ 生活の中で「いのち」を実感する場面

自分以外のものの「いのち」や、自分自身の「いのち」、また「いのち」のつながりなどといったものを実感した経験の有無について11項目を設定した。

回答は、「当てはまる(5)、ややあてはまる(4)、どちらでもない(3)、ややあてはまらない(2)、あてはまらない(1)」の5肢選択法によって求めた。

- 4 実施続き：講義時間を利用して集団実施したものと休み時間などを利用して個別に実施したものの割合は半々である。

結果

1 殺生行動尺度

研究Iの場合と同様に項目別の平均値と標準偏差、バリマックス解の結果を表2に示す。3因子解で、全分散の41%を説明している。研究Iの結果と比較すると、因子1の「嗜虐的殺生」因子、因子3の「教育活動としての殺生」因子については因子負荷量に多少の違いは見られたものの因子項目は完全に一致した。1または5に選択が偏った項目、因子付加量の低い項目を除外した結果を再分析として示した。項目数は、「嗜虐的殺生」が13、「生活のための殺生」が4、「教育活動としての殺生」が3であった。信頼性係数を算出したところ、因子1は0.92、因子2は0.69、因子3は0.74と、かなり高い値であった。

2 生活経験尺度

提示した項目を想定した場面別に示したのが表3

表2 研究Ⅱの殺生行動尺度として用いられた項目

使用した項目	平均	標準 偏差	因子分析			因子分析(再分析)		
			F 1	F 2	F 3	FF 1	FF 2	FF 3
① 日常にありえる殺生項目								
8. ナメクジに塩をかける	4.14	1.24		.528			.709	
9. 木を切り倒す	4.34	0.98		.475			.434	
12. クモを新聞紙で叩き殺す	3.56	1.63		.450			.623	
13. 花壇の花を抜く	3.64	1.50		.365				
18. 生きている貝でみそ汁を作る	4.17	1.27		.382				
19. ハエをはえ叩きで潰す	4.43	1.43		.490			.667	
21. 健康な木を燃やす	3.70	1.45		.310				
26. 蚊を手で潰す	4.66	1.00		.201				
② 教育上必要な殺生項目								
1. カエルの解剖をする	3.13	1.54			.889			.885
2. フナの解剖をする	3.50	1.49			.796			.857
3. ヒトの解剖をする	2.03	1.30			.594			.741
③ 日常の中にはほとんどないと思われる残酷な殺生項目								
4. 雛のいるスズメの巣を壊す	1.40	0.86	.520				.573	
5. カエルを踏みつぶす	1.38	0.85	.624				.647	
6. カタツムリを踏みつぶす	1.66	1.13	.637				.651	
7. カブトムシを棒で叩き殺す	1.50	0.97	.692				.707	
10. カメの腹にナイフを刺す	1.33	0.72	.757				.780	
11. コオロギの足をもいで殺す	1.79	1.18	.537					
14. カメの甲羅を剥ぐ	1.25	0.62	.671				.563	
15. スズメを水に沈めて殺す	1.22	0.62	.688				.735	
16. ザリガニを踏みつぶす	1.51	0.72	.753				.774	
17. 雛のいるカラスの巣を壊す	1.54	0.97	.694		.441			
20. ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める	1.93	1.31	.550				.581	
22. カブトムシの腹にナイフを突き刺す	1.46	0.89	.737				.756	
23. カメを火の中に投げ入れる	1.49	0.99	.656				.691	
24. ヘビの頭をナイフで落とす	1.83	1.30	.507				.524	
25. 雛のいるツバメの巣を壊す	1.34	0.74	.721				.760	
27. 飼っていた犬や猫を買い続けられなくなったなら、野良犬や猫にしないで、何らかの方法で命を絶つ	2.00	1.21	.338					

である。項目別に見た場合、最も値が低く、経験がないのは「飼っていたニワトリやウサギを殺して食べたことがある」の1.20で、逆に最も高いのは「生きているうなぎやコイなどがさばかれるのを見たことがある」の3.59である。食物になるものが殺される場面はみたが、自分では手を下す経験がないこと

がわかる。

バリマックス解の因子分析を行ったところ、固有値1以上の因子解は8因子解で全体の65%を説明した。しかし解釈が難しいので、あらかじめ想定していた3種類前後2~4因子までを設定し、再度回転をかけた。その結果、4因子解が上記の調査内容で

表3 経験尺度作成のために提示した項目の結果

使用した項目	平均	標準 偏差	因子分析			
			F 1	F 2	F 3	F 4
① 場面 特に理由のない殺し						
1. 子供の頃虫や小動物を使ってよく遊んだ	3.46	1.46	.418			
8. 今思い返してみると虫や小動物に残酷なことをして遊んでいたと思う	2.98	1.53	.791			
13. 虫や小動物を殺して遊んでいた	2.30	1.51	.835			
② 殺す理由のある殺し						
9. 生きているうなぎやコイなどがさばかれているのを見たことがある	3.59	1.72				
15. 飼っていたニワトリやウサギなどを殺して食べたことがある	1.20	0.77		.293		
16. 山菜やキノコなどを採ってきてよく食べる（食べた）	2.89	1.63		.746		
18. ドジョウやイナゴなどを獲ってきて食べたことがある	2.05	1.66		.479		
③ 生活の中で「いのち」を実感する場面						
2. 自分の親は虫が苦手である	2.48	1.42				-.433
3. 水不足になると風呂に入る回数を減らしたり、沸かし湯にししたりする	2.72	1.49			.330	
4. 子供の頃はガキ大将がいて、集団で遊ぶことが多かった	2.96	1.40			.454	
5. トイレで排尿する際に音がするのは当たり前、水を流したりして隠す必要はない	3.13	1.50			.295	
6. 子供の頃おもちゃよりは自然のものを利用して遊ぶことが多かった	3.40	1.19			.504	
7. 外で遊ぶよりは家の中で遊ぶほうが楽しかった	2.49	1.24			-.277	
10. 汗はにおいの元になるのでできる限り汗はかきたくない	2.84	1.49			-.132	
11. 親から虫や小動物をむやみに殺してはいけないと教わってきた	3.34	1.33			.156	
12. 虫や小動物を殺したことで罪悪感にさいなまれたことがある	3.48	1.42			.264	
14. 家で犬や猫を飼っていた（飼っている）	3.12	1.97				.460
17. カメや小鳥などを飼っていた（飼っている）	2.82	1.92				.492

設定したような場面と最も整合性を示したので採用した。4因子解で全体の27%を説明した。

当該因子に.4以上、他因子に.3以下の負荷量の基準で因子尺度を決定した。

第1因子は「虫や小動物を殺して遊んでいた」、

「今思い返してみると虫や小動物に残酷なことをして遊んでいたと思う」等の遊びの中での殺しの経験についての項目から構成されているため「野生遊び」尺度とした。第1因子の項目数は3である。

第2因子は「山菜やキノコなどを採ってきてよく

表4 2つの尺度の結果（平均（標準偏差），相関係数）

生活経験		殺生行動		
		嗜 虐	生 存	教育活動
		1.45 (.64)	4.12 (.85)	2.89 (1.24)
野生遊び	2.91 (1.20)	.26**	.27**	.26**
食物採り	2.47 (1.37)	.18**	.13*	.14*
集団遊び	3.18 (1.01)	.05	.04	.10
飼育経験	3.15 (1.24)	.02	-.09	.05

食べる（食べた）」「ドジョウやイナゴなどを獲ってきて食べたことがある」という食料として動植物の「いのち」を奪い、食べた経験の有無の項目から構成されているため「食物採り」尺度とした。項目数は2である。

第3因子は「子供の頃おもちゃよりは自然のものを利用して遊ぶことが多かった」、「子供の頃はガキ大将がいて、集団で遊ぶことが多かった」の項目から構成されているため「集団遊び」尺度とした。項目数は2であった。

第4因子は「カメや小鳥などを飼っていた（飼っている）」、「家で犬や猫を飼っていた（飼っている）」といったように飼育経験の項目から構成されているため「飼育経験」尺度とした。項目数は3である。

4尺度についてそれぞれ信頼性係数を算出したところ「野生遊び」尺度については0.72、「食物採り」尺度については0.51、「集団遊び」尺度については0.45、「飼育経験」尺度については0.47という値が算出され、「野生遊び」尺度以外については残念ながら信頼できる値ではなかった。

3 殺生行動尺度と生活経験尺度の相関

殺生行動尺度の3尺度と生活経験尺度の4尺度の平均と標準偏差、および両尺度間の相関を見たものが、表4である。

殺生行動尺度のうち、「嗜虐的殺生」の平均値は1.45で、平均値1の人が46%と多い。逆に「生存のための殺生」の値は高く、全ての項目にできると回答した平均値が5の人は21%いる。「教育活動としての殺生」は、その中間に位置する。「嗜虐」と「生存」の男子の値が高い。

生活経験の内、最も値が低く経験が少ないのは、「食物採り」で、野山で山菜を採る、虫や動物を捕まえた経験が少ないことがわかる。「集団遊び」と「飼育経験」の値は高く、「野生遊び」と「集団遊び」の男子の値が高い。

殺生行動尺度と生活経験尺度の各下位尺度間相関の結果からは、「殺生行動」と関連するのは、「野生遊び」と「食物採り」の2下位尺度で、特に「野生遊び」との相関は1%で有意である。「集団遊び」と「飼育経験」の2下位尺度とは相関がない。いわゆる教育的な生活経験は殺生行動と関連がないこと、「飼育経験」は、「生存のための殺生」とマイナスの相関であることは興味深い。ペットを飼った経験のある子どもは、かわいそうなのでイナゴなどを捕って食べるができないのかもしれない。

研究 III

研究IIでは、「生物を殺生する行動」と関連するのは、「野生遊び」と「食物採り」で、「集団遊び」や「飼育経験」は関連しないことが明らかになった。この結果は多くの同人の注意を引いたが、筆者らの研究に対して、質問項目の問題や尺度間の因果関係に幾つかの疑問が呈せられた。具体的には、①殺生行動尺度の項目と生活体験項目とは類似しており、生活体験があるからその行動ができると考えていると考えていいのか、②野性的な生活体験が殺生行動に関連していることをどう説明するのか、③学校教育や家庭教育などでの価値観・しつけの役割をどう考えているか、などであった。そこで、同じく大学生を対象として、「殺生行動尺度」をさらに改善す

表 5 価値観に関する項目とその結果

使用した項目	平均	標準偏差	因子分析				因子分析(再分析)					
			F 1	F 2	F 3	F 4	FF 1	FF 2	FF 3	FF 4		
1. 親が子どもをたたくことはいけなことである	3.34	1.10										
2. 食事の前やトイレの後は特に汚れていなくても手を洗う	4.20	1.12	.587	-.205								
3. 高齢者がいつまでも現役で働くのはすばらしいことだ	4.08	0.96	.306									
4. 虫や小動物を殺すと罪悪感にさいなまされる	3.54	1.03	.418									
5. 授かった人命はどんな場合でも育てられるべきである	4.01	1.07	.553									
6. ある程度けがや事故の危険があっても子どもを川や池で遊ばせる	3.60	1.16		.544								
7. 臓器移植はもっと積極的に行われるようになるべきだ	3.94	0.91					.230					
8. 妊娠中に胎児に重い障害があることがわかったら中絶すること	3.08	1.02		-.300								.607
9. 自然保護のためでも、水洗トイレがない場所に宿泊することは避ける	2.88	1.35										
10. 子どもにはできるだけ動物と接する体験をさせる	4.40	0.76	.379									
11. 高齢者から同じ話を何度も聞かされるとうんざりする	3.12	1.10										
12. ある程度の危険があっても子どもに包丁や火を使った料理を経験させる	4.24	0.89		.644								.541
13. 子ども連れの場合には、親はたばこを吸うべきでない	4.44	0.85	.228									
14. 増えすぎた猿や鹿を殺すのは当然のことである	2.63	1.08	-.553									-.500
15. 妊娠しにくい場合には子どもを産むために可能なかぎり手段をとる	3.80	1.03	.324									
16. 賞味期限の切れた食品は自分では食べない	2.33	1.26		-.441								-.376
17. 鹿やウサギのハンティングを体験してみたい	1.86	1.16	-.396									.407
18. 電車のつり革や手すりなど不特定の人が触れるところはなるべくさわらない	1.92	1.09		-.292								
19. 薬はなるべく飲まないで病気を治す	3.41	1.40										-.288
20. 病院からもらった薬は名前や効き目を確認する	3.17	1.32	.117									
21. クラス担任の教員が自分の子どもが病気の時に休みをとって看病するのはあたりまえのことだ	3.67	1.13										
22. 痴漢にあつて困っている女子高生がいたら助ける	3.66	1.04										
23. 罪のない人を意図的に殺したら死刑になって当然である	4.08	1.07										
24. 簡便な方法で胎児の障害の有無を調べられるならば行ってみる	3.98	1.09										
25. 汗は体臭の元となるのでできるだけ汗をかきたくない	2.70	1.28		-.407								
26. 野生の動物に餌をやつて可愛がつてみたい	2.89	1.34										.321
27. 病気の絶滅が心配されるとしたら、捕獲するべきでない	4.14	0.98	.375									
28. 病気になるたら早めに病院にかかるといい	2.70	1.38										
29. ホームから落ちた人がいたら飛び降りて助ける	2.76	1.15										.545
30. トイレで排尿する際に水を流してわざわざ音を消すのはばかげている	2.65	1.35										.279
31. 本人や家族が希望すれば、安楽死は認められるべきである	4.35	0.92										.320

るとともに、「生活経験」と「価値観」・「殺生行動」との関連を検討することとした。

方 法

1 調査対象：大学生198名（内、男子：75名、女子：123名）

2 調査時期：2003年1月中旬

3 調査内容：提示した順序に以下に記す。

- ① 価値観 生命尊重・環境保護・清潔・健康保持・救助・安全の31項目について、「自分の考えや行動に近いかどうか」を「あてはまる～あてはまらない」の5段階評定で求めた。具体的項目は表5参照。
- ② 生活経験 研究Ⅱの結果を基に、小学生時代の遊び・飼育・食物・生活に関わる21項目の体験を「あてはまる～あてはまらない」の5段階評定で求めた。具体的項目は、表6を参照。
- ③ 殺生行動 研究Ⅱの結果を基に、解剖・生存・嗜虐に関わる21項目について「できるかどうか」を5段階評定で尋ねた。具体的項目は表7を参照。

結果および考察

1 価値観に関する結果

肯定的表現の評定値を5、否定的表現の評定値を1として、項目別平均を求めたところ、「鹿やウサギのハンティングを体験してみたい」の1.86から「子ども連れの場合には、親はたばこを吸うべきでない」の4.44まで分布した。結果を表5に示す。

バリマックス解の因子分析をしたところ、固有値が1以上の因子が4個抽出された。全分散の34%を説明している。この結果も表5に示した。1または5の回答が30%以上の項目を除外し、再度バリマックス解を行い、当該因子に.4以上、他因子に3以下の単純構造になるまで項目を削減する因子分析を行った。その結果、以下のような因子尺度を構成した。

「授かった人命はどんな場合でも育てられるべきである」、「増えすぎた猿や鹿を殺すのは当然のことである」（下線は逆転項目であることを示す）等の4項目からなる「生命尊重」、「ある程度の危険があっても子どもに包丁や火を使った料理を経験させる」、

「ある程度けがや事故の危険があっても子どもを川や池で遊ばせる」等の4項目からなる「冒険」、「簡便な方法で胎児の障害の有無を調べられるならば行ってみる」、「妊娠中に胎児に重い障害があることがわかったら中絶する」の「障害児排除」、「痴漢にあって困っている女子高生がいたら助ける」、「ホームから落ちた人がいたら飛び降りて助ける」の「人命救助」の4因子尺度を構成した。

2 生活体験に関する結果

肯定的表現の評定値を5、否定的表現の評定値を1として、項目別平均を求めたところ、「残酷なテレビゲームをよくやった」の1.65から「家族旅行をした」の4.59に分布した。結果を表6に示す。

バリマックス解の因子分析をしたところ、固有値が1以上の因子が6個抽出された。全分散の34%を説明している。この結果も表6に示した。1または5の回答が30%以上の項目を除外し、再度バリマックス解を行い、当該因子に.4以上、他因子に.3以下の単純構造になるまで項目を削減する因子分析を行った。その結果、以下のような因子尺度を構成した。

「家で犬や猫を飼っていた」、「飼っていた犬や猫が死んだことがある」の「ペットの飼育」、「自然のものを利用して遊ぶことが多かった」、「虫や小動物を使ってよく遊んだ」等の3項目からなる「自然経験」、「殺し合いの場面のあるマンガをよく読んだ」、「残酷なテレビゲームをよくやった」の「残酷なゲーム」、「受験勉強をした」、「進学塾に通っていた」の「受験勉強」、「地域の子ども会に参加していた」、「秘密基地を作って遊んだ」等の3項目からなる「集団遊び」、「集団で遊ぶことが多かった」、「外で遊ぶよりは家の中で遊ぶ方が楽しかった」、「いじめられたことがある」の「屋内遊び」、の6因子尺度を構成した。

3 殺生行動に関する結果

その行動を「できる」を5とし、「できない」を1として、項目別平均を求めたところ、「転居で飼えなくなったので、ペットの猫を殺す」の1.14から「ハエをはえ叩きで潰す」の4.34まで分布した。結果を表7に示す。

1または5の回答が80%以上の項目を除外し、主

表 6 生活体験に関する項目

生活体験に関する項目	平均	標準 偏差	因子分析						因子分析(再分析)							
			F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	FF 1	FF 2	FF 3	FF 4	FF 5	FF 6		
1. 虫や小動物を使ってよく遊んだ	3.57	1.35	.663													
2. 集団で遊ぶことが多かった	3.85	1.24														
3. 生きている魚や鳥などさばいたことがある	2.01	1.52														
4. 家で野菜や花を栽培したことがある	4.31	1.19	.660													
5. 年に1回以上は家族で墓参りをする機会があった	4.21	1.39	.337													
6. 残酷なテレビゲームをよくやった	1.65	1.15														
7. 進学塾に通っていた	2.68	1.88														
8. 学校行事以外のサーキーキャンプに参加していた	2.46	1.68														
9. 家族でスキーやキャンプに行った	3.38	1.72	.263													
10. 祖父母との交流が頻繁にあった(ある)	4.38	1.08														
11. 親は虫が苦手であった	2.32	1.35	-.235													
12. 自分で釣ったり、採ったりしたものを食べたことがある	3.66	1.60		.399												
13. 家で犬や猫を飼っていた	2.51	1.89			.775											
14. 自然のものを利用して遊ぶことが多かった	3.84	1.27	.655													
15. 身近な親類や知人の死を体験したことがある	3.58	1.74														
16. 病気やけがで手術を受けたことがある	2.11	1.68														
17. 殺し合いの場面のあるマンガをよく読んだ	2.30	1.49														
18. 高齢、障害、傷病等のため介護の必要な家族がいた(いる)	2.03	1.60														
19. 最初にクラブ活動に参加した	4.15	1.29														
20. 飼っていた犬や猫が死んだことがある	2.09	1.73		.438	.920											
21. 地域の子ども会に参加していた	3.91	1.52														
22. 受験勉強をした	2.89	1.89														
23. 外で遊ぶよりは家の中で遊ぶ方が楽しかった	2.56	1.28														
24. 秘密基地を作って遊んだ	4.13	1.26														
25. 家族旅行をした	4.59	0.94														
26. たき火やかまどで火を燃したことがある	3.86	1.60		.354												
27. いじめられたことがある	2.69	1.54		.411												

表7 殺生行動に関する項目

折衝行動に関する提示項目	平均	標準 偏差	因子分析			因子分析(再分析)		
			F 1	F 2	F 3	FF 1	FF 2	FF 3
1. 理科の実験のために、フナを解剖する	3.60	1.53	.609				.597	
2. 転居で飼えなくなったので、ペットの猫を殺す	1.14	0.55						
3. 飼っていた鶏の首を食べるために絞めて殺す	1.77	1.28	.681				.602	
4. 雨戸が閉められないのでスズメの巣を壊す	2.62	1.52	.265					
5. コオロギの足をもいで歩けなくする	1.78	1.14		.712		.793		
6. 突然に道に出てきた蛇を棒で叩いて殺す	1.85	1.34		.638		.628		
7. 縮まるのが面白いので、ナメクジに塩をかける	3.16	1.58			.418			
8. 食べるために、釣ってきた魚をさばく	3.97	1.37	.546					
9. 風通しをよくするために、木を切り倒す	3.45	1.35			.521			.624
10. 飛んできたせみを火の中に投げ入れる	1.47	0.96		.719		.754		
11. 面白いのでカブトムシの腹にナイフを突き刺す	1.18	0.58						
12. 部屋の中に入ってきたクモを新聞紙で叩き殺す	3.24	1.65		.350				
13. 部屋に活けるために花壇の花を切る	3.99	1.32			.611			.741
14. ザリガニのえさにするために、カエルを殺す	1.87	1.32	.438					
15. 生物学の授業で、犬の解剖をする	1.67	1.26	.577				.648	
16. 増えないために、カラスの雛のいる巣を壊す	2.24	1.50	.483					
17. 生きている貝でみそ汁を作る	4.11	1.37			.552			
18. ハエをはえ叩きで潰す	4.34	1.17			.336			
19. ねずみ取りにかかったネズミを水に沈める	1.86	1.29		.512				
20. 近所から苦情が来たので、オンドリを殺す	1.49	0.97	.548					
21. 面白いので、カタツムリを踏みつぶす	1.35	0.85						

因子・バリマックス解を行い、「コオロギの足をもいで歩けなくする」、「突然に道に出てきた蛇を棒で叩いて殺す」等の3項目からなる「嗜虐」、「理科の実験のために、フナを解剖する」、「生物学の授業で、犬の解剖をする」等の3項目からなる「解剖」、「風通しを良くするために、木を切り倒す」、「部屋に活けるために花壇の花を切る」の「植物」の3因子尺度を構成した。「飼っていた鶏の首を食べるために絞めて殺す」は、自宅ではなく、学校で体験されていることが反映されているのであろう。

4 生活体験・価値観・殺生行動尺度間の重回帰分析

殺生行動の各下位因子尺度を基準変数とし、生活経験と価値観の下位因子尺度を説明変数とする重回帰分析を行った。

標準偏回帰係数によって示すと以下のようなになった。

「嗜虐」= -.354 (ペットの飼育) + .211 (障害児排除)

「解剖」= -.453 (ペットの飼育) + .195 (屋内遊び) + .172 (自然経験)

「植物」には、有意な変数は見出されなかった。

「嗜虐」的殺生には、「ペットの飼育」という経験がマイナスに働き、「障害児排除」の価値観がプラスに関連することが明らかになった。「解剖」のための殺生には「ペットの飼育」が大きくマイナスに関連するが、同時に「屋内遊び」と「自然経験」という生活経験もプラスに関連することが明らかになった。「屋内遊び」が、「解剖」にプラスに働くことについては慎重な解釈が必要であらう。

まとめと討論

本論文では3種類の調査研究の結果を報告した。

研究Ⅰは、それ以降の研究で使用する殺生行動に関する質問紙法の尺度を作成することが目的であった。残酷性、日常性、教育性という3因子尺度が抽出された。

研究Ⅱは、その尺度の検討と、殺生行動と生活経験との関連を見た。結果は、殺生行動尺度としては、「嗜虐的殺生」、「生存のための殺生」、「教育活動としての殺生」が研究Ⅰと同様抽出された。また、「野生遊び」や「食物採り」といった自然下での体験が殺生行動の種類に関わらず有意に相関があったこと、「集団遊び」や「飼育経験」という教育的な生活体験は殺生行動と関連がないことが明らかになった。

研究Ⅲは殺生行動に影響を与えるものとしての生活経験と価値観の効果を見たものである。「嗜虐」、「解剖」、「植物」という3因子尺度が抽出され、「嗜虐的」殺生には、「ペットの飼育」という経験が妨害的に働き、「障害児排除」の考えの持ち主は可能と考えていた。また、「解剖」のための殺生には、価値観は関係なく、「ペットの飼育」・「屋内遊び」・「自然経験」という生活経験が関与することが明らかになった。「植物」には、いずれもが関与しなかった。

本研究では人間が他の生物を殺生するときの気持ちの理解、躊躇の程度などを測定することをまず第1の目的とした。この点に関しては、研究の進行によって、若干因子名の変更を余儀なくされたが、安定した尺度が構成されたと考える。つまり、嗜虐的殺生、生存のための殺生、教育的活動のための殺生であり、研究Ⅲでの「植物」は、生存のための殺生に近いものである。これらのうち、生存のための殺生あるいは植物の殺生は可能とする傾向にあり、嗜虐的殺生には否定的傾向があった。

研究の第2の目的である、殺生行動に影響を与える要因の分析であるが、この点に関しては必ずしも安定した尺度ができあがっているとはいえない。研究Ⅱでみようとした生活経験と研究Ⅲでみようとした生活経験では、それらを構成する内容が異なっており、今後の検討が必要である。同様に研究Ⅲで導入した価値観もまだまだ不安定なものである。

しかしながら、研究Ⅲで明らかになったように、殺生行動の種類によって、関連する生活経験や価値観が異なることは今後の研究の新たな展開を示唆するものである。

今後の課題としては、第1に、これらの質問紙によって殺生行動傾向の可能性を見たものが実際に行動として可能であるのかを検討することが問われるだろう。これは殺生行動の質問紙尺度の妥当性を検討することになる。また、そのような実際の行動を通じて、実際にそのような殺生行動を生起させるときに生じる感情や判断の機制を明らかにすることが可能となっていくであろう。筆者らは、人間が生きていく上には、必要な殺生があり、それをおこなう痛みを感じる人間に育てることが必要であり、それが「かわいそう、気持ちが悪い、誰か他の人がして」という反応を少なくしていくことに通じると考える。

ところで、今回調査の対象となってくれた学生達は、「ペット飼育」の経験は多いが、家畜を飼った経験は少ない。また、生活を快適に過ごすための植物採取や害虫の駆除はしばしば行い抵抗はないが、脊椎動物の殺生の経験は少ないと予想される。現在、幾つかの小学校では、総合学習の一環として飼育していた動物を殺して食べるという実践を行っていることが報告されているが、学生の脊椎動物への殺生行動への抵抗感がきわめて高いことから、これらの実践への否定的態度を読み取ることができる。今回の結果は、子ども達に殺生行動の意味を理解させる上で飼育動物を殺して食べるという実践が、人間が生きていくことを真剣に考えさせる上で効果を持つためには、きわめてきめの細かい事前指導が行われていなければいけないことを示唆している。

また、いわゆる「デス・エデュケーション」と呼ばれる、いかに人間の死を認めていくかの教育との関わりも今後の課題の1つになることは言うまでもない(得丸他, 2000, 2001)。

参考・引用文献

- デーケン, A. 2001 生と死の教育 岩波書店 シリーズ教育の挑戦
今井孝太郎 1989 「生と死」の意識-「死」の心理と

- 教育(Ⅲ) - 龍谷大学論集 433 2-14
- 今井孝太郎 1989 「死」の心理学的考察 龍谷大学論集 434, 435 (合併号) 59-72
- 今井孝太郎 1991 死別体験の意義 - 「死」の心理と教育(Ⅳ) - 龍谷大学論集437 2-20
- 今井孝太郎 1994 「生と死」に関する意識の発達の考察(Ⅰ) - 「死」の心理と教育(Ⅶ) - 龍谷大学論集 444 2-31
- 今井孝太郎 1995 「生と死」に関する意識の発達の考察(Ⅱ) - 「死」の心理と教育(Ⅷ) - 龍谷大学論集 445 2-33
- 林昭志 2001 現代青年の生き方に関する意識調査 - 中学生・短大生を対象としたアンケート調査 - 日本教育心理学学会43回総会発表論文集 19
- 芳賀明子 2001 生命についての児童・生徒の意識に関する研究Ⅱ - 児童・生徒の「死観」について - 日本教育心理学学会43回総会発表論文集 650
- 仲村照子 1994 子どもの死の概念 発達心理学研究 5 61-71
- 立花隆 1994 生, 死, 神秘体験 【立花隆対話篇】 書籍情報社
- 丹下智香子 1999 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究 70巻 4号 327-332
- 得丸定子・田原加津江・嵐美香 2000 学校教育における「死の教育」: 死に対する意識調査から見た学校教育とのかかわり方 日本家庭科教育学会誌 43, 1-7
- 得丸定子・米澤浩子・吹山八重子 2001 学校教育における「いのち教育」の重要性と取り組みについて - 特に家庭科教育の視点をふまえて - 上越教育大学研究紀要 21, 1, 11-20

った。]

(みうら かなえ 生活機構研究科)

(ながさわ ようへい 千葉市立宮崎小学校)

(いしい まさこ 植草幼児専門学校)

〔研究ⅠとⅡは、三浦を指導教官として、第2著者である長澤陽平氏が提出した平成13年度の千葉大学教育学部教育心理学教室の卒業論文を基礎としている。研究ⅠとⅡの質問紙の項目選択は主として長澤氏が行い、研究Ⅰの資料整理も彼が行った。研究Ⅱの資料分析は彼の入手した資料を基に三浦が再分析を行った。研究Ⅲの項目作成は三浦と石井氏が行い、資料分析は主として三浦が行